

## おしば標本棚のアイデア (金井弘夫) Hiroo KANAI: Proposal for Herbarium Cabinets

**Summary:** A herbarium cabinet with roll screen instead of leaf door is proposed for improved working environment in the herbarium.

金井 (1991) で、移動式おしば標本棚に適する形状について意見を述べておいた。その中で最大の問題点は、扉と照明装置だった。移動式の場合、扉はない方がはるかに使い勝手がよい。照明灯が通路の中央にくるための装置は場所ふさぎで、天井灯の手直しで足りるのに、予算区分の関係で同じ経費で処理できない。

標本というものは時とともに増加するのがあたり前だが、それに応じて標本庫を増築できるわけではない。「スペースが足りない足りないと言いつつながら、後から後から標本をため込んで、いつになったら終わるのですか？」という言葉は、事務官の常套語である。彼らは展示施設のような、増設効果がすぐ目に見えるものでないと関心が低い。と言って当初計画で将来を見越して、手持ち標本量を大幅に上回る床面積を要求しても、認められるとは思われない。したがってどの標本室でも、いずれは収容力が大きい（と言ってもそれほどでもないが...）移動式を考えねばならなくなる。

ところが移動式に適したおしば標本棚はまだコレというものはなく、従来型の棚を台車に載せて、不便をかこちながら使う結果となる。扉のついた標本棚は、とくに移動式では、標本の整理・移動の大きな障害となる上、ガス燻蒸の効果を妨げる。標本害虫のシバンムシやチャタテムシは、こういう遮蔽物の隙間を楽に通り抜ける大きさなので、扉はあっても無くても関係ないだろう。だから前報では、扉の無い標本棚を提案した。これに対して「扉が無いと、埃がたくさん入り込んで不都合だ」との意見があった。たしかに標本室内では、エアコンが常に空気をかき回しているから、埃が隅々まで行き渡る。それに、扉のない標本棚では汎用性がなく、従来型の標本室に並べたり、研究室で単独で使ったりするとき、不用心だし標本の風化も激しいだろう。一方、「密閉性が

よいと、防虫剤のガスがいつ迄も停滞して、利用者や管理者の健康に悪い」という意見もある。だからこういう遮蔽物は、適当な量の空気の出入りは許容されるのだろう。

防火について心配する人がいるが、標本室が火災になれば、従来の扉つき標本棚でもなんの役にも立たないことはおわかりと思う。標本棚に耐火機能をつけようとしたら、金庫なみの構造を必要とし、われわれの扱う予算ではとてもまかなえるものではない。火災は標本室の外側で防ぎ、万一室内に火が入ったときには、自動ガス消火装置などで対応するほかはない。

いろいろなスタイルの標本棚をまぜて台車に載せてしまうと、扉の開閉ができなくなる場合がある。また老朽化した標本棚を取り替えようとしても、互いに密接に連結固定してあるうえ、新しい標本棚とは寸法が違おうし、照明システムなどとも構造上の関係があるので、更新は簡単にはできない。

標本室の使い勝手は、研究用に標本を出し入れする都合がまず考えられ勝ちだが、最も考慮せねばならないのは、新着標本を挿入したり、満杯の棚の中身を移動調整したり、防虫剤の手入れをしたり、ガス燻蒸のために全標本棚を解放したりする、キーパーの日常業務の便宜である。従来の扉つき標本棚では、たとえばある段が満杯になって、隣の標本棚に余裕があるのでこれを調整しようとするとき、一段ずつ標本を順送りにして行くわけだが、二つの標本棚にまたがる部分では、両方の扉を一々開け閉めしながら作業をしなければならないので、たいへん手間がかかることは、キーパーたる者だれでも経験していることである。そうでなくても扉があるために、脚立やテーブルの移動にも一々扉の開閉を行わねばならないので、標本室の経常作業の自由さは格段に悪い。予算の制約で、対面する固定棚間の通路を狭くとらねばならない環境では、それが一層切実である。以上のことから、遮蔽装置は一応必要ではあるが、開閉に際して通路を遮らないものが望ましい。また金属以外にも、プラスチックシートや難燃布も、考

慮に入れてよかろう。

そこであらかじめ、移動式に対応できるおしば標本棚で、経常作業がやり易く、しかも固定式や単独でも使えるものを考えておいたらどうだろう、というのが本報の趣旨である。そうすれば、試作することによって構造や強度を吟味できるし、寸法や価格を把握できるので、移動式にせよ固定式にせよ、標本室の計画がたて易い。試作と言っても、業者が簡単に応じてくれるようなものではないことは承知しているが、普通のおしば標本棚を発注する際新しい仕様を提示すれば、数がありさえすれば、そして将来性が認識されれば、検討対象となり得るだろう。あるいは、既設の従来型の標本棚を一部改造して、効果を見とどけるのもよいだろう。

(1) 基本構造：標本棚本体の構造は、従来と同じである。ただし扉はつけない。扉は不要という方針なら、このまま使えばよい。

(2) 扉つき：基本構造に扉をつけたものが、従来型の標本棚である。扉の蝶番の取り付け位置によっては、標本棚を横並びに、あるいは壁際に置くと、扉が隣の棚や壁に当たって開くことができない場合があるので、慎重に設計する必要がある。引き戸については、おしば標本棚としては考慮の外に置いてよいだろう。

(3) シャッター式：車庫や店舗に使われている上下式のシャッターなら、扉と違って開閉のスペースを棚の外に必要としない。小型の物置にも使われている。その代わりに、上部(あるいは内部)に突出した巻き取り部のスペースが必要になる。そのサイズは材質と長さで決まる。長さ(標本棚の高さ)はもともと決まっているから、金属製ならば突出は大きくなるだろう。金属製にこだわらなければ、他の材質のものを考える方がよい。

(4) ロールスクリーン式：標本棚を閉じる理由は、前記のとおり風化の防止と埃の進入を防ぐことが目的となる。ロールスクリーンは金属製シャッターと機能は同じで、材質は布やプラスチックシートを選べるから、巻き取り部の大きさはごく小さくて済み、標本棚の上部に突出することはないだろう。その代わりに、最上部の棚の収容量に、多少の影響があるかもしれない。東大ハーバリウムで使用している標本棚では、最上部が防虫剤の入れ場になっているので、これを少し工夫すれば収容量に影響ないだろう。ガイドレールをつけてスクリーンの両側を挟み込めば、密閉性はよりよ

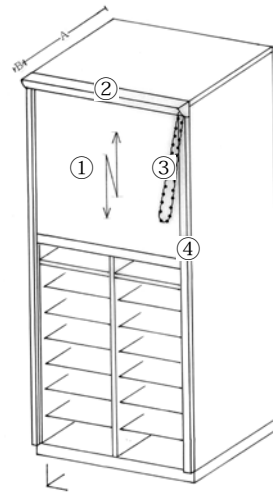


Fig. 1. Sketch of new-type herbarium shelf.  
① Screen. ② Screen housing. ③ Rolling cord. ④ Guide rail.

くなる。こういう形式は、窓や出入り口に取り付ける防虫ネットに見られる。巻き上げはスプリング式とプルコード式があり、プルコード式の方が故障が少ないだろう(図1)。ロールスクリーンの機構は、長さや間口にに応じて選択できるように用意されているので、基本構造の標本棚に応じてその外面に取り付けることができる。だから、扉つきの標本棚を使っても、扉をロールスクリーンに交換することは可能と思う。扉よりも前方への突出が大きいように見えるが、取り付け方を工夫すれば、解決の道があるだろう。

(5) カーテン式：ロールスクリーン式でもよいという気になってみれば、それよりはるかに簡単なカーテン式も視野の内だろう。ここまでくれば、あらためて説明の必要はあるまい。

照明：移動棚と連動する照明装置は、構造が複雑で標本棚の配置換えを不可能にする上、標本棚の上部空間の利用を妨げる。この装置は無用で、天井灯を適当に配置すれば足りる。あるいは、標本棚の上部に蛍光灯を直接取り付けられることもできよう。

このような標本棚は、扉がないために歪みに対する強度が不足するかも知れないので、どんな材質と構造のものを用いればよいのかを検討せねばならないが、従来型を基本とする限り、特に問題があるとは思われない。

移動式架台を使う場合には、架台の横幅を標本棚を並べた寸法より幾分余裕をもたせておき、し

かも棚同士の横の連結を容易に外せるようにしておけば、傷んだり老朽化したりした棚を入れ換えることが容易だろう。

私はもはやこういう標本棚を試作させる立場にはないので、せまい通路で能率の悪い作業をさせられているキーパーの方々や、移動式を検討し、あるいはすでに導入しておられる機関の方々の参考になればと思い提案する。

試案についてご意見をうかがった国立科学博物館植物研究部の秋山 忍氏、東京大学総合研究博物館植物部門の清水晶子氏にお礼を申し上げる。

#### 引用文献

金井弘夫 1991. 移動式おしぼ標本棚の得失. 植物研究雑誌 66(3):176-180.

(184- ) 小金井市  
Koganei,  
Tokyo, 184- ) JAPAN)

## 新刊

□ Tsunehiko Nishikawa (ed.): **Chromosome Atlas of Flowering Plants in Japan. National Museum of Nature and Science Monographs No. 37.** B5. 706 pp. 2009. Library, National Museum of Nature and Science, 3-23-1 Hyakunin-cho, Shinjuku-ku, Tokyo, 169-0073 JAPAN. ISSN: 1881-9109.

北海道教育大学の西川恒彦氏による、日本の顕花植物の染色体数総覧である。1-461 ページは種類別のリストで、種類、配偶体、孢子体、出典の見出しの下に、カウントされた染色体数が、複数の出典があれば年代順に列記されている。植物の配列は科・属・種の学名の abc 順である。発表が現行の学名と異なる場合には、現在に合わせて整理されており、約 780 属、5,700 の分類群が見られる。462-706 ページは、これらの根拠となった約 6,200 の文献のリストである。染色体数は、タクソンを扱うときに重要な情報なので、それを見やすい形に整理して下さった西川氏の永年の努力を評価したい。

近頃は分子レベルの研究が隆盛で、染色体レベルの仕事は影が薄くなった感がある。種類別リストから概算してみると、1910 年代から始まった報告数は、1940 年代の大戦の影響とみられる谷を経て 1980 年代にピークとなり、1990 年代に入って減少に転じている。我国の顕花植物の染色体は数え尽くされたのかというと、そんなことはあるまい。時流に流されず、一つの仕事をやり続ける人がいてほしいものだ。

本書には頒価がついていない。国立科学博物館新宿分館図書室に問い合わせたところ、モノグラフシリーズには元々頒価はついておらず、研究機関や図書館から希望があれば頒布に応じるとのことだった。「こういうリストはデータベース検索できるようにしてあればよい。その方が金も手間

も時間もかからずに情報が得られて便利だ」という声が出るに違いない。確かにユーザーには便利この上ないだろうが、私には首をひねる点がある。そういうデータベースは、担当者の不断の努力なしには維持できない。絶えず更新される結果、参照はできても引用はできない。そして担当者がいなくなれば消滅してしまう。某研究機関のウェブサイトには「本ウェブサイトの情報を無断で転用することを禁ずる」と書いてある。公表している情報を転用（つまり引用）するのに一々許可を求めろというのは、転用されたときにはそのウェブサイトの情報が更新されて変わってしまっていて、作者の責任を問われる心配があるからだろうと思う。だから、ウェブサイト情報として公開するのは作者のサービスとしても、一度はハードコピーとして出版し、情報を固定しておけば、ユーザーは普通の仁義を切るだけでそれを引用できるし、そのハードコピーは作者の業績として残るだろう。(金井弘夫)

□ 柏谷博之: **地衣類のふしぎ** サイエンスアイ新書. B5 版, 206 pp. 2009. ¥1000. ソフトバンククリエイティブ (株). ISBN: 978-4-7973-4153-9.

著者が言うとおり、これは地衣類の専門的な知識の普及のために書かれたものではない。しかし、一般の人々にとって馴染みの薄い地衣類を身近なものと感じ取って貰うためには、本書に収められた彩り豊かな地衣類の写真の数々はそれなりに効果的である。本書は、著者が 40 年以上の調査・研究の途上で撮り集めた地衣類の写真集であるから、こんな形で紹介するには勿体ないような、見事な写真が随所に見られ、折に触れて楽しむことができる。

図鑑を利用するには、それなりの専門知識が必